
月 刊

MéLange

VOL.95



2014.09.28

詩と評論

月刊

「Mélanges」 VOL.95

2014/09/28

月刊「Mélanges」編集部

詩 & 俳句

遠いカエル／朝からミドリムシ……………中嶋康雄 03

庭小人 Gartenzwerge……………岩脇リーベル豊美 04

連想ゲーム 8……………野口 裕 05

ぶーふうー……………月村 香 06

的中……………上野 都 07

生まれて……………にしもしめぐみ 08

告知……………寺岡良信 09

観月吟五句〈俳句〉……………大橋愛由等 10

白夜光〈俳句〉……………三谷白水 11

矩形の詩夢……………大橋愛由等 12

5.5時間後……………御着かおり 13

水の要塞……………福田知子 14

バルドトルの切片……………千田草介 15

肆の夢 上（ゴジラがでるぞの巻）……………高谷和幸 16

夜が来て……………富 哲世 17

もう朝近くに 小屋を通り過ぎたものがある……………木澤 豊 18

エッセイ

HANAだより06 〈映画『イーダ』……………半世紀にして語られる者たち〉……………中堂けいこ 19

<神戸詞あしび>83 「秋日和の休日に散策してみると」……………大橋愛由等 20

編集部だより★16／今年の関西の夏は暑さが続かず曇天が多い季節でした。さぞ関西電力は原子力発電なしの電力供給危機を喧伝できなくて残念がっていることでしょう。かたや九州電力や北海道電力では、自然再生エネルギーで発電した電気の買い取りを制限しはじめました。理由は、売電事業者(社)が増えて電力受容を上回る事態となり、現在も新規の売電希望者(社)が控えているためにこの際制限しようということです。こうした事態を受けて電力会社側の立場にたって記事を書き続けているのが読売新聞。電力会社も読売新聞も思惑は一致しています。政府が策定した自然再生エネルギーで発電した電気買い取り義務化は(民主党政権時代に造られた法律ですが)、電力需給の現状を反映していない無謀な政策である、ということです。つまり「安価で発電量を制御できる」原子力発電を稼働させることを優先すべきとの本音を主張したいのです。しかし素人なりに考えますと、いまや電力会社は〈発電〉と〈送電〉ばかりではなく、〈蓄電〉の能力を増やすべきでしょう。供給を上回る電気を蓄えておいて不足時に使うというシステムを構築すべきではないでしょうか。(大橋記)

◆遠いカエル

中嶋康雄

カエルは薄い
フワフワと空中に散布され
からつぽのまま
鳴いているか交尾している
遠くの輪が
荒れ果てた池を教えてくれる
薄汚れた発泡スチロールが泳いでいる
一緒に泳いでみる
つまらないなあ
カエルは薄い
笑いは薄い
ぼんやり
カエルが行き交う生臭い夜
池がにゆるにゆる這い出してくる
藻がにゆるにゆる這い出してくる
カエルの卵が藻にくつついている
卵から黒目がぞろぞろのぞいている
朝になると
黒い
がらくたが
ただ
死にかけながら
藻掻いている

◆朝からミドリムシ

中嶋康雄

朝から食べるものが
ミドリムシしかない
なつかしいご飯やパンは消えて久しい
容器にミドリムシが湧いており
スプーンですくって食べるのだ
アブラゼミが
うらぶれた電柱で
足を滑らせ続け
落つこち続ける
長い長いアリの行列が
待っている
日は照りつける
アリは蒸発し続けるが
行列は次々とやってくる
地底から女王アリの叫び声が聞こえ続ける
ふるえる容器に
ミドリムシがもこもこ湧き
もこもこ湧きつぱなし
つけつぱなしのテレビが垂れ流す涎を
泣き叫ぶ赤ん坊と肥った毛むくじやらの蛾
が
吸い合う吸い合う吸い合う
五月蠅い涎が
ミドリムシを称え続ける

瞬時の暇無く
トカゲが
アスファルト上
卵を産む砂地を探す
青い涎に足をとられては
ひからびてゆく
尻から産みたい卵が
垂れ下がって
揺れる
揺れる
揺れる
朝から
ミドリムシをむさぼり食う
尻から鞭毛を垂らす
消化不良
便器にへたり込む
口からは
南無阿弥陀仏
もやもや
ミドリムシ

◆庭小人 Gartenzwerge

岩脇リーベル豊美

庭小人の消息を尋ねて歩くが
 彼らを見掛けることは滅多にない
 庭小人は何処ですかという問い掛けに
 村人たちは軽い嘲笑を湛えた儘
 そんな俗物は此処には居ないと答えるのが常である
 彼等は何処に行きましたか

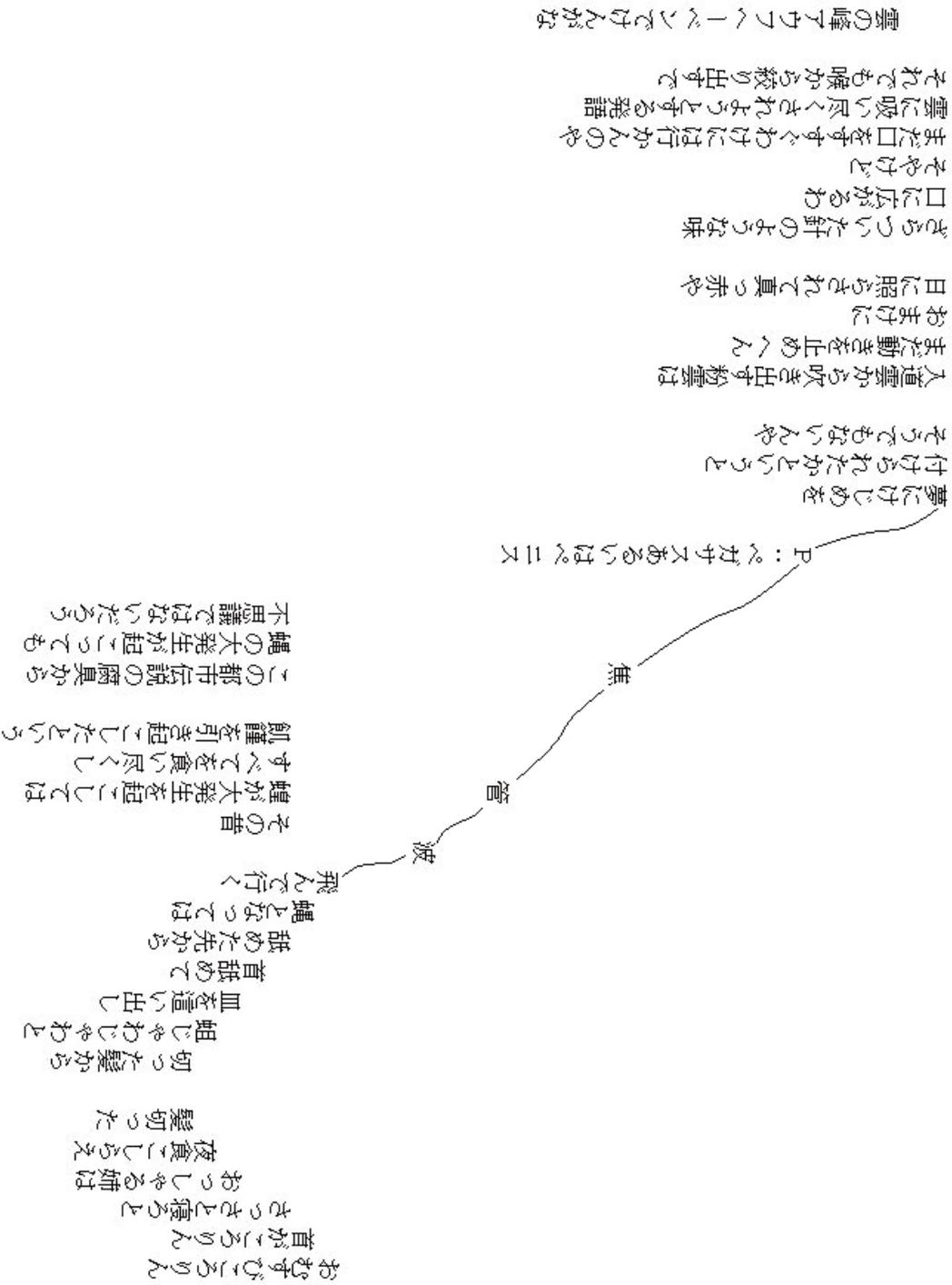
近年は世界経済に暗雲が立ち込めている為
 街には様々な亜種の店舗が増え
 庭小人達の居場所は最早無くなってしまった
 私は遠い、だが
 人類創世と謂う程遠いとは思われない時代を
 思い乍ら文字通り足を棒にして探した
 浪漫派詩人が漂泊していた時代には
 民家と木々の谷間に深く沈む上弦の月が
 庭小人の表情を褒め称えていたし

彼等はその恩報にと
 生まれたばかりの赤児を零す事さえしていた
 どの森の奥にも必ず息を潜めて
 庭小人を生み出し育てる職人が暮らしていたが
 後を継ぐ者と謂う若者は減り続け
 其の大半が欧州共通通貨ワンコインで
 取り敢えず粗悪な食器や絆創膏を求める事も出来る
 中規模近代自我の都会に向かうのである
 思い通りにならない日常に途轍もなく苦しむ人達も
 安売り店に底墓と無く立ち寄れば
 自分で買える異国生まれの妖精や天使の恩恵に
 感謝することだろう
 そして其等は越よ無く美しく映えることだろう

だけどバイエルンの庭小人達は
 今哉絶滅の危機に瀕しているのだ
 悉く楽園に突った毒林檎を喰らい
 自滅しようとすらしている
 私は尋ね歩いた末に物を書いているのだ
 噴出しては消え崩れ去る運命に在る
 王室御用達の職人が刻んだ庭小人達が
 棲息しない庭は枯れ果てる事を知っている
 多額の代価を捻出したとしても購入不可能な
 頗る貴重な表情を味わおうと思つて止まない

◆連想ゲー△8

野口裕



◆ぶーぶーうー

月村香

わたしは自分が紙を折ったりそれをはさみで切ったりしている姿が好きだなんてかわいらしいのだろうあたまのてっぺんにおだんごをゆってもらいその小さなお手は小さなはさみをぎゅつと握りしめているもう少しお姉さんがお弁当箱を開ける頃になるとおかあさまに呼ばれエプロンを着せられお昼ごはんねミルクを飲むのね決して切りとったりんごのことを忘れないのねあとで赤くぬるのね夢見ているのねいつもいつも小さいワンピースからおしりがプリプリしてまだ妹は生まれていないのねあの頃のあの至福よ

第二声..

本当はエルンストが読みたいが、最後に読んだのが、二年前で、それ以降……

◆的中

上野都

円に満ちた月
薄青い羊の群れを引連れ
完美の影を照らす

やって来たものと
発つものが
互いに弓を引き絞り
放つ前の
膝を折る前の
無音の哄笑が響き渡る
ゆうべでなくてもいい
こんやでなくてもいい

それなのに いま
わたしをかぞえるな

草の原をゆく
影のあとは千々に削がれ
天空に立ち消え
しがみつく風ばかりが重い

光に欠け
影に満ちる月

わたしをかぞえるな
わたしを踏め
わたしの重さに叶うほど
この額を射よ
かたちを在るうちに。

◆生まれて

にしもとめぐみ

〈おめでとう〉

ねんねの赤ちゃんだったときは
手足をばたばた
ねがえりだつてできなかった
お口はなんでもべろべろ

一歳のきみは

小さなお尻も
座つたり
たつたり
お口だつて忙しい
コップでのんだり
お菓子を食べたり

お耳だつて大活躍
ちゃんと用事を
聞き分けてる

初めてのおしゃべり
いつなかな
待っているよ

きみの言葉が
頭の中でぐるぐる
羽ばたいている

◆告知

寺岡良信

流れ星が眠りの出口を探しても
わたしには目覚めはこない

奢侈と欲望を行き来した金貨の
果てなる姿のやうに

いまは
荒涼と
潮騒を照らす月よ

コインの文様には磔刑が似合ふと
不在の王がさう告知したから
廃墟には沙金採りの
貧しい筈も棄てられて
涙は虜囚の
劫暑の夏に
嗄れる

二〇一四・九月八日 中秋の名月 姫路城にて

観月吟五句

大橋愛由等

月読を折檻するには観月楼

ルナティック！嗤い合う優良児

嘘ばかり芒原で聴いたのに

生玉子月にかざして国歌斉唱

月照なりシナプスつながり原罪に

◆白夜光

三谷白水

白夜光リンネの部屋の試験管
しあわせの大きく見ゆる薔薇の門
青き蝶三寸の夢生るる刻
カンナ咲くわたしはわたし試着室
向日葵の影震へるやアルルカン
茹でたてのそら豆に似し子規のかほ
葉の裏に染め残したるさくらんぼ
炎天や片頬焦げしマリア像
揚羽蝶焦土の水を吸ひにけり
称賛を極めて墜ちし花火かな
それぞれの胸におさめし終戦日
森深く尺取虫が骨測る
惜別の金鉾打てよ法師蟬

諦観の流砂で見るは濃竜胆
まなうらに父の狼藉水の秋
階段に菊の籬や舞踏会
嗚咽するキリンは銀河抱きにけり
満月にダンテの小舟漕ぎ出でぬ
冬夕焼吸ひこんでゆく四国かな
浮舟の艚の音軋む冬の川
球面の荒野を敲く冬の月
冬麗やハーブ茶会の緋毛氈
玄冬や鎌研ぎにくる大鴉
福助の月代に積む雪の蒼
日脚伸ぶほたほたと烏賊煮らる
春隣メビウスの輪の恋人よ
解かれて音符跳ねるや春分点
春愁やほくろにも陰宿るらむ
間一髪電車飛び乗る春コート
夜桜や黒塚の婆刃研ぐ

◆ 矩形の詩夢

大橋愛由等

プラトールである

向かいあえば
気ままを装いながら
交わされるのは沈黙
座っているあいだは
ひとりごともはばかられ
アルベキコトがどっかり座り
すべての隣人は道学者ぶって
慈悲を配分すべきという不文律

そこで
いくつの紙飛行機が
折られたらどうか
座ったものたちは
強いられることなく

もくもくと
文字をしたためた後に

軽いため息ついて

折りつづけ

飛翔を前提に

つくられている

とも

つくられていない

とも

そこに

いつものように置かれた

手回し挽肉機

急いで三回転すると

昨日のにくしみが忘れられ

逆回転すると

明日の嫉妬はひとつだけ

赤と黄を混ぜると

あらがいのない

普通が約束される

と

いつのまにか

すこしのはにかみ

をまじえて

伝えられてきた

叙事

そこでは

御伽衆の嘘が

ゆいいつの

語りの種

嘘を見抜いたら金一封などと

毎夜繰り返し

みんな飽きているのに

御伽衆の嘘がなければ

口をもごもご動かすだけ

席をたてばすむことだけど

みんな

矩形の夢を

みつづけてたい

と願っているはず

なので

ときどき

紙飛行機を

飛ばしてみる

けれど それらは

とどいているのか

とどいていないのか

◆ 5・5時間後

御着かおり

買ってきたばかりのスーツケースを燃やしてしまう
なぜだろう

電車の荷物棚に乗せたまま

2つある臓器の片方を忘れて

到着した駅の100円均一の店先では財布を落とす

気がついたら

足の中指が溶けている

背骨を折ってしまったのは何年前だったのか

両目が見えないので日記をめくる事は無意味だけれど

コッセツとヤケドとビョウキを数えて

手術と入院で囲んでみよう

どん兵衛の天ぷらそばがすぎです

なくなってしまったものは戻らない

薬を落としながら歩くわたしの

どれぐらいの時間が経ったのか

お腹に手術の傷が滲むように現れてきて

今度は何をなくしたのだろうか？

杖はドアの横に立てかけているけれど

もう思いつく事ができない

点滴からブザーが鳴った

◆水の要塞

福田知子

私が私のからだに一ミリもの距離をとらずにグツと接近して話しかけると肉や骨や粘膜が一度にそれに応じようと乗り出してくる。とくに鼻の粘膜が直接脳細胞にスキッとつながり話のネタを探すまでもなく私の話の喰いつく。こうした反応に私がびつくりして息を深く吸い込むと可笑しなことにどこからか水分が溢れてきて鼻の粘膜を潤すのだ。それは律儀にヒタヒタ、ポタポタと鼻孔を絶えず潤している。一体わたしの水分はどこから溢れてくるのか。給水するときはもちろん喉や鼻からだだが、反対にからだの中から溢れてくるのか。想定外のやいかたで流れだし沁みだしてくるのだ。自覚はないが皮膚の表面から霞みや霧になつて絶えず蒸発しているし、はつきり自覚的なのは尿となつて噴出する水だ。最後には海まで流れついていくのはいうまでもないことなのだが、もつとも意外だったのはつねに水が鼻孔のあたりを潤していること。呼吸すると涼しい風が身体の中へと入っていく。それはまったく外と内の水を循環させる天然のクーラーに違いないと妙に感心したりしている。さてこの夏、医者に病気が治りにくいのも疲れが一向に取れないのも《慢性的プチ熱中症》だから。ともかく水を飲むこと、コーヒーやお茶ではいけない！と言われた。それ以来わたしはひたすら水を飲み続け、そんなわけで私の鼻孔はつねに瑞々しく潤っており、だから当然飲み続けないと鼻孔から萎れていく。水を補給し続けるという強迫観念を植え付けたのは医者か私か。それとも私の鼻孔か――いまとなつてみれば真相はわからないが植物に毎日水を与え続けるように、私は私のからだがつねに二リットルの水を与え続けなければならない。そうでないと私のからだは私の怠惰によつて萎れていくのだから。これは重要な任務である。水の要塞を守り続けること。こうした過剰は水の惑星にいていながらにして水であるひとを消滅させることが可能になるという結論になりはしないだろうか……

◆バルドトルの切片

千田草介

アレppo松の実を石鹼水に漬けて創世記の七日を七回反芻する聖牛に与えたとその口の端にぶくぶくと虹色の泡がトンボの複眼のようにもりあがつてカリブ海の電波望遠鏡から転送された信号を解析する。その映し出された波形はカトマンドウの祠にいますドウルガー女神が産気づきながら無数の殺戮をやつてのけたときの心電図と寸分たがわず重なり、踏みしだかれた髑髏の雪白にかがやくヒマ・アラーヤの地底にもぐりつつある南譚部洲の数十億の民へ無慈悲に微笑みかける

◆肆の夢上(ゴジラがでるぞの巻)

高谷和幸

夜になる。

(夢を流れる河

…表面と見える近接さから…

五感のスクリーンが流されていた。

流れるがそのものの上にかぶさって

新しいものに壊れてしまった流れるしぐさ

それがいつしか流れることが水から火になる

…さかいめのかなしみ…

夢のプリほどき)

よりしろは一つ

また一つ

そのよりしろの上に置きながらぼくたちは

夢を歩いて行った。

お城に続く黄色いアーケードの下を散歩していると

「骨董店がいいだろう」と庭が言うので

店の軒先にある青い床几の上に置いてやった。

(骨二ヨリ

白色の

名もないような

人であったものたちに触れているつやつやした傷

吊るされて

人知れずくぼみ、腐敗する

「触れる」ことのできない被膜との官能。

触れる

「ふれる」が夢の五色に「縁れている」

…宇宙のアナコルソン…

そのとき、ぼくを庭がそう呼んだ。

ぼくたちがそうなのだとき思った。

…サカイメカシメ)

どうやら、水が燃えているらしい。

腰を落ち着かせた庭は白い髭を生やした老人になっていた。

手元に四角い御膳を置き

鉢の中には煮物が入っている。

アナドロマスの泥色は色順にそぐわないから

その皮を剥ぎ

赤い肉のような顔をして酒を飲んでいる。

(プリの

さらなるプリへ移動する)

来た道は、臍の奥だよ。帰る道は、また臍の奥だよ。

ふうーと吐いた息が

アーケードの軒先をこえて護国神社の木立の間を抜けてい

った。

つた。

*プリ(襲)

*アナコルソン(破格構文) パラバシスやアナコル

◆夜が来て

富哲世

1 (変奏曲)

鼾だ

鼾だ鼾だ

だれかが言ってる耳もとで

鼾だ

鼾はなにも言わない

小石や窪みに当たって

浅瀬に乗り上げて足踏みして逆走して

そのたびにゴゴゴ

と鳴いている古いラジオの風の流れを変えて

いるだけ

しずかさを穴だらけにして

いないカノジョを引き裂いているゴゴゴ

夜のはたけで

夏のバツタが死にかけているポッチを押すと

虫の音の始まる立体便箋で

お見舞いの寄せ書きの文字が草の手を揺らして

窮屈そうに締めき合いながら笑っている

どこから来てどこへ行くのか

やって来ながら過ぎ過ぎながら留まっている

と言われる風だ

近くとおくでゴゴゴ

やっぱり覚めないゴゴゴ

懲りないゴゴゴ

唄っても鳴りやまない

クラーを止めたのに

掛けぶとんの下の靴下を履いた足下がいやに

スースーする

夜行バス用の耳栓を強く詰めなおすと頭が水

で重くふさがれたようで

溺れ死ぬときだんだん小さくなっていく

人と世界の完結を見るようだ

鼾の歌でいつばいの頭のなかを

よだれ流しながら

なにやらがおどかすように

やってくるのかしら

ぎしぎし

ただそれだけのことなのに

誰かに話しかけずにはおられない。

セミだつてそうだ

落ちて仰向けになって

宙に足を開いて

ただそれだけにじつとつながりを待ってる

(未来の絵画となつて)

くちばしを開いた夜が

細く長く鳴き続けている

腕にくつきりと捺し型を付けて

そこからほどかれていく悪い物語が

自分のすきまを恥ずかしくする

誰にも気づかれないままに

不安を打ち消すために

ツェランの詩の一節を唱え

からだだけが毛布の浅いぬくもりに

溶けていくようだ

3 (朝が来て)

夜明けのストリップバー

眠っている

目覚める

廊下を通り

忍び足で近づいてきて

カーテンのすき間からのぞく

ぼくと言うのがはずかしい

けれどわたしでも

おれでもない

目当てがあると言うわけでもない

きのうがよみがえって来ない

朝が来て

うすくサッシ窓をあけると風に乗って

混然と街のせせらぎが登ってくる

山のカラスがたしかめるように

間近で鳴き交わしている

早起きの街と

早起きのひとと

眠らない機械が開く

変わらぬ空の下のはじまりの声だ

やがてつくつくぼうしが鳴き始める

黙って葉っぱがそよいでいる

たくさんの死をかかえて

つながっている

◆もう朝近くに小屋を 通り過ぎたものがある

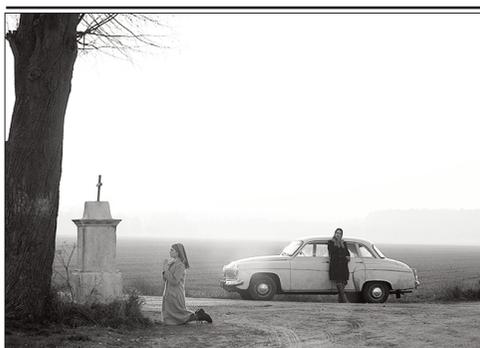
木澤豊

赤い作業帽子の若い男が少し年上の赤い肌の男に立ち上がって 殴りかかって手を上げた
積んだ薪が一本落ちて埃が散った
勢いか本気なのか
おれはそいつを知ってるんだと赤帽子が怒鳴った
だれかが眼鏡をはずし割って入る
傍らで焚き火が煙を上げ 鉄鍋が獣の匂いを立てている
窓の外をみたまの夜のまん中を
白いシーツをからだに巻いた女が遠くよぎり
しめった枯れ葉の匂いがする林の暗がりに入った
あれは蛍だったかな

どこからか
波音が聞こえる
老人がそう老人とわかる腕の消えた男が裸で 薄明かりに照らされて
土の匂いのなかを 夜空に向かって
ぼうっと通り過ぎた

小屋の火が消えて 遠くで人の叫びが
一度だけ
一度だけ 聞こえた
この村の歴史をだれに訊いても 知らないと言う

映画『イーダ』……半世紀にして語られる者たち



映画パンフレットより

モノクロームの魅力を存分につかいこなす、つまりは抑制のきいた映画だ。場所は一九六二年のポーランド。一八歳の主人公アンナは孤児で修道院で育てられ、修道女になるための誓願式をひかえている。傷んだキリスト像を彩色するアンナ。一心な面差しと身ごなしは神に仕えるにふさわしい。カメラはバルコニーから、四人の尼僧がキリスト像を雪で白く塗った庭にはこびだすシーンをワンショットで撮る。カメラの視線がよく練られているのがわかる。セリフがほとんどない。今こうして書いていてもアンナの声を忘れてしまっているくらいだ。
ある日、院長に呼び出され、誓願式の前に伯母に会いに行くように命じられる。伯母は姪のひきとりも面会も拒否していたことが知らされる。アンナは乗り物をのりつぎ街でくらす伯母のヴァンダに会いに行く。あなたの名は「イーダ」ユダヤ人よ。みんな死んだわ。伯母は判事の職についていることは話の展開になかであかされる。ヴァンダは妹にそっくりな姪に出会うことで一八年前の一族の終末にむき合う決心をする。もう神なんて信じられないかもしれないわよ。自分の車を運転して家族の住んでいた村をめざす。ヴァンダはタバコを吸い酒ビンをラッパのみし、宿でもいさぎずりの男をひっかけようとする。姪のイーダはその様子をじつとみつめる。

映画はロードムービーの雰囲気ですすみ、途中ヒッチハイクで若くてハンサムなサックス奏者を拾う。このあたりから話にすこし幅が出てくる。コルトレイン

H A N A 便り 06

この土に馬鍬を入れると 玄武岩のかたまりに かつ 当たり刃がゆがむ

刃先ははるか遠く
空の大きな黒い波が ゆらつと 傾く
足下で 松ヤニが焦げる匂いがする

きょう 日暮れがなかった
たしかに なかった
船乗りの赤いキャップが 闇に浮いている

おーい 白い影
おーい 夜気のにじみ
おーい わたしの途切れがちな心音

あつまろう 見えない岩盤に
見えない海辺の
砂利の上に
人のかたちに乾いた塩が
風に吹かれ

ああ さくさくのつめたい砂の足触りが
とおく なつかしい
そういう場所に まもなく たどりつく
それから
こんな風景は

わたしの深さで
海に沈んでいく
積んだ砂へ
ゆら ゆら ゆら

が流れる。
家にはポーランド人の家族が住んでいた。先住のユダヤ人のことは知らないとつっぱねられる。事情の知らない若い妻は修道女すがたのイーダに赤子を差し出し、祝福を願う。イーダは祈りを捧げ赤子の額に指をかざす。そんなショットが過去のいきさつをいつそう複雑にしていく。無神論者で共産主義者のヴァンダは無視する。村人たちは二人に冷たい視線をおくる。当事者である、農夫の父は重病のベッドで二人に証言する。妹とその夫、幼いヴァンダの息子は自分たちが殺したと。森にかくまっていたが最後は隠しきれず(ナチスから)。森に埋められた三人のところへ息子の農夫が手引きする。

ポーランドは欧州でもっともユダヤ人の多く住む国であった。ある資料ではホロコースト以前は五〇〇万人といわれ総人口の一割であった。以後は五万人に激減する。ナチスの絶滅作戦はポーランド人にまで及んだ。身を守るために自ら手をくださなければならなかった、だがそこには歴史的反ユダヤの感情があつたのもたしかであるらしい。
なぜ私は生き残ったの? イーダの問いに農夫の息子は「赤ん坊は幼すぎた、色が白かったので教会に捨て子として預けた。男の子はだめだった。色が黒くて割礼をうけていた」そう言つて身の丈ほど土を掘り起こして三人の頭骨を見つけた、その穴に身をかがめ泣き崩れる。どうか許してくれ。

モーツアルトの四一番が鳴り響く、ヴァンダの高級アルバム。ピンヒールを響かせガウンをなびかせて歩き回る彼女が格好いい。一族の写真をならべ決別する。
イーダは伯母のハイヒールを履きドレスをまとう。ヴェールを取つた彼女はほんとにうつくしい。サックス吹きの男と一夜をすごし、その明け方、海岸に家を建てよう、結婚して子供をつくつて犬を飼おう、背中あわせで男が夢を夢で語る。イーダ、あなたは生き残つたのだから普通の幸せを求めてもいいのだ。しかしイーダは修道院にもどり一足遅れて誓願式にのぞむ。イーダの瞳は迷いなくまっすぐに何かを見つめている。何かを求めるのではなくすでに承知している、あ

からさまでない知性がそこにある、と信じている。

中堂けいこ



曾我蕭白「猿図杉戸」(一部)
(展覧会チラシより引用)

秋日和の休日 に 散策してみると

なにも予定をいれない日がひょこんと出来て、ひたすら身体を休めようと思った。九月二四日(水)のことである。

しかしどうもいけない。「せっかくだから」を動因とする貧乏症が災いして、拙宅ちかくで開催している「曾我蕭白展」を観に行こうといそいそと出かけていった。

私が利用するのは阪急神戸線・岡本駅。そのひとつ西隣が御影駅である。岡本とJR摂津本山駅周辺には三つの大学があつて若者の乗降が多いため、駅前はずっとした街として賑わっている。大手の飲食チェーン店・スターバックス、マクドナルド、ケンタッキーフライドチキンほかはたいがい揃っているが、テナントの出入りは激しく、退去したチェーン店も多い。その理由の一つとして、テナント代が神戸の中心地である三宮並みに高いからと言われている。

かたやひとつ駅が遠うだけで御影駅周辺は、様相が異なる。商業店舗は岡本に比べて少ない。街としての賑わいは岡本に比べて閑かであるが、同駅周辺は邸宅が多く住む街としての落ち着きがある。

御影駅を下車してすぐ東に向かうと大邸宅が立ち現れる。その広さは、邸宅の多い御影の中にあつても、他を圧するものがある。「曾我蕭白展」の会場である香雪美術館もその大邸宅の一角にある。その邸宅の住民は、村山さん。この村山さんは全

国紙のオーナー(社主)である。朝日新聞。この新聞社の創業一族であり、今でも社主の位置は変わりない。阪神間に

は、こうした創業者一族が蒐めた美術品を展示する私設ミュージアムがいくつあつて、それぞれの得意分野のディレクタートぶりを発揮している。

★ 同美術館はこぶりで丁寧な作品を観るむきには適したサイズである。曾我蕭白(1730-1778)は伊藤若冲、長沢芦雪とともに嗜好の画家として人気を博している。

では蕭白のどこが奇なのかを考えてみた。まず狩野派のように予定調和が前面に押し出された美や構図ではない(狩野派の筆法もまた美的見地から生まれた必然なのだろう)。ダイナミックな構図の展開。作品自体にも観る者にも緊張を強いるそのありよう。大胆な筆使いと細部にこだわったその両極端が同居しているさまが奇なのだろうか。

蕭白のこの奇にのぞむ画風は生きていた間も人気があり、贋作も出回ったという。若冲が請われるままに「売茶翁」の絵を何枚も描いて希望者に授けたことも同時に思い出してみる。

この画家の経歴の詳細は分かっていないことが多いという。伊勢や播州・高砂などでも仕事をしたのであるが、活動の拠点、京であつたということである。同時代の画家である円山応挙、池大雅、与謝蕪村が活躍していたのもまたこの京の町である。これにあえて関連づけようとするれば、上田秋成も晩年は京の町で生活することになる。さらに個人的な経験をまじえて語るとすれば、私も学生時代に五年間京都に住んだことを踏まえて考えてみると、この京・京都の町というのは、奇を生み出し、奇を造るひとを尊重し、奇をめぐる風が時代を超えて通底しているのではないだろうか。

★ 村山邸の西隣は、弓弦羽神社である。ここには三本足の八咫鳥が祀られている。在神戸のサッカー市民球団(ヴィッセル神戸、INAC神戸)が詣る神社のようである。邸宅地と美術館と古社。御影という町を彩るこうした静謐な道具仕立てを離れて私はふたたび人と店を賑わいを作り出している岡本に帰ってきた。ここは学生街というほどでもないが、若者たちが自分たちの嗜好に従って運営する小売業があり古書肆も数店あつてそれらを見て回るのは心地よい。ただせっかくなの休日の昼下がりがだというのに、昼から開いて酒肴をかたむける酒肆がないのが悩みだ。昼は吞まずに働きなさいと命じている健全な街なのである。

詩と評論

月刊『Mélange』VOL.95
めらんじゅ

2014年09月28日 通巻95号
発行所/月刊『Mélange』編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等 (『Mélange』同人)
Mobile 090-5069-1840
maroad66454@gmail.com
定価 500円 (税込)